

日本労働年鑑 第57集 1987年版
The Labour Year Book of Japan 1987

第四部 労働組合と政治・社会運動

III 政党の動向

6 日本共産党

1 概況

同日選での善戦

八六年七月六日投票の衆参同日選挙で、共産党は衆院で二六議席、参院比例区で五、選挙区で四、参院合計九議席を獲得した。これは前回とくらべて、衆院で同数、参院比例区で同数、選挙区で二増、参院合計二議席増という結果になる。おしなべて野党が議席を減らすなかで、衆院で現状維持、参院で前進をみたことは、善戦と評価できる。その他の指標でも、衆院の相対・絶対得票率でそれぞれ、〇・五五%、〇・一四%と微減したのを除けば、衆院得票数、参院比例区・選挙区の得票数、同相対・絶対得票率のいずれにおいても増加を示している。とくに、参院比例区で得た五四三万票は、全国区を含めてこれまで最高のものであった。

反核国際シンポ

八五年七月一〇～一三日、日本共産党の主催で「核戦争阻止・核兵器廃絶」国際シンポジウムが日本青年館で開催された。二七カ国の共産党・労働者党の代表約四〇人が参加し、うち一九人はボス・ソ連最高会議民族会議議長など各党の中央役員クラスであった。日本共産党主催の国際シンポは七二年の第一回以来四回目だが、これまではいずれも資本主義諸国の党によるもので、ソ連・ベトナムなどの社会主義国の共産党・労働者党の参加は今回が初めてであり、また、世界各国の共産党が核廃絶をめぐる本格的に討議するのも初めてのことであった。シンポジウムでは、核戦争阻止、核兵器廃絶の基本的な方向ではほぼ意見が一致したものの、核廃絶の内容や位置づけ、具体的な方法、核軍拡競争におけるソ連の責任、一方的な核戦力の削減などの問題をめぐって各国の意見の違いが明らかになり、激しい論議がかわされた。なお、シンポジウムに参加した二七カ国の共産党・労働者党の名前はつぎのとおりで、その発言の詳細は『前衛』八五年九月特集増大号に掲載されている。

(1)アイルランド労働者党、(2)アルジェリア民族解放戦線党、(3)イギリス共産党、(4)イタリア共産党、(5)インド共産党(マルクス主義)、(6)オーストラリア共産党、(7)オランダ共産党、(8)キューバ共産党、(9)スイス労働党、(10)スウェーデン左翼党(共産党)、(11)スペイン共産党、(12)ソ連共産党、(13)デンマーク社会主義人民党、(14)ドイツ社会主義統一党、(15)ドイツ共産党(DKP)、(16)ニカラグア・サンディニスタ民族解放戦線、(17)日本共産党、(18)ノルウェー社会主義左翼党、(19)ハンガリー社会主義労働者党、(20)フィンランド共産党、(21)フランス共産党、(22)ブルガリア共産党、(23)ベトナム共産党、(24)ベルギー共産党、(25)メキシコ社会主義統一党、(26)ユーゴスラビア共産主義者同盟、(27)ルーマニア共産党。

第一七回党大会の準備の過程で、『赤旗』が大会議案についての意見を募集したのを契機に、方針にたいする反論や疑問が表面化した。これは七〇年代後半から党勢が伸び悩み、民主連合政府が実現しなかったことなどを背景としたもので、方針に誤りがふくまれていたとする批判の一部は、『赤旗評論特集版』にも掲載された。これにたいして『赤旗』は、「民主連合政府のスローガンをめぐって」(二月九日付)、『『国政選挙での一進一退』とはどういうことか』(二月一〇付)という論文を発表して、「党の方針が正しくても、反動支配層との力関係のために、党が後退をよぎなくされるということが起こりうる」と反論し、党大会席上でも、不破委員長の報告で、反動攻勢に最悪の形態でとりこまれたものとしてきびしい批判がおこなわれた。

さらに、大会が開かれた一九日午前、会場近くの路上で東大大学院生支部の一院生が党執行部批判のビラを配布するなどの動きがあった。このような動きにたいして党中央は五人の院生を六ヵ月間の党员権権利制限処分に付し、八六年一月一六日付で東大院生第二支部所属の党员(ペンネーム伊里一智または浦地実、実名未発表)を除名処分とした。

不破・ゴルバチョフ会談

八六年八月四～一三日不破幹部会委員長を団長とする代表団が、日ソ両党定期協議のために訪ソした。ソ連側の事情で開催が遅れていた不破・ゴルバチョフ会談は、八月一一～一二日におこなわれ、席上、ゴルバチョフソ連共産党書記長は、八五年二月の米ソ首脳会談での共同声明について、ソ連は「忠実に守っていく」と述べ、核戦争を戦わない決意や包括軍縮交渉への意欲を改めて表明した。また、レーガン米戦略にたいしては、「軍備競争を宇宙に持ち込み、紛争を継続させる」と警告した。

これにたいして不破委員長は、日本共産党が核戦争阻止、核兵器廃絶の目標を掲げ、参核三原則の厳守などのための闘いをつづけていることを説明するとともに、つぎの定期協議を同じく首脳会談として東京でおこなうことを提案し、書記長の訪日を招待した。双方は、八四年一二月の核兵器廃絶にかんする両党共同声明が「依然として活力を持って生きつづけている」こと、反核・平和運動で両党の協力を強化すること、「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」でも具体的協力をおこなうことなどを確認した。

不破・ゴルバチョフ会談は、八五年三月のチェルネンコ書記長の葬儀の時に次いで二度目だが、本格的な会談は今回が初めてであった。

チェコ共産党との関係修復

八六年三月三日、共産党は八一年以来交流が途絶えていたチェコスロバキア共産党との関係改善を明らかにした。

日本労働年鑑 第57集 1987年版

発行 1987年6月25日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月1日公開開始

